【W7】「音楽療法士にとってのエピソード記述　―心について考えるための質的研究―」

【講師】大倉　得史、山本　知香

【要旨】

音楽療法の実践では、安心感や自己肯定感、積極性、自発性、気持ちの交流など、心に関する支援が目指されることがあります。そのような場では、クライエントもセラピストも、様々に心を動かしながら参加していることでしょう。音楽をどう感じ、相手の心をどのように感じるかによって、関わりの方向性が決まり、それがセッションの結果を動かしていきます。たとえばクライエントの歌に合わせてピアノを演奏するときには、テンポや音量をどうするか、終わり方をどうするかなどについて、クライエントの様子から感じ取ったことをもとにその都度選択し微細な調整をしているはずですし、次の活動に切り替えるタイミングも、場の雰囲気を察知して決めているはずです。そしておそらく多くの場合、クライエント本人も、セラピストが何をどのように受けとめ、自分に何をさせよう（！）としているのか、敏感に察知しているのではないでしょうか。セッション中は、見えない意図の糸がさまざまに絡み合い、結果として様々な思いが生まれ、クライエントの心に影響を及ぼすことになります。しかしそうであるにも関わらず、「感じたこと」は目に見えず、客観的な証拠として提示できません。そのため、個人的なセラピストの記憶の中には残っても、それがセッションの記録として残り、発表の場で扱われるような機会はとても少ないのではないでしょうか。

本講習では、実感を重視し、関わりについての省察をするための方法として、エピソード記述という質的研究のあり方を紹介し、実際にその一部を体験してもらいます。客観的な証拠を提示できないから研究しないのではなく、目には見えないからこそ描き、考察の対象として浮かび上がらせ「これでよかったのか」と問うことによって、実践の質の向上を期待したいと思っています。

本講習は、2コマ連続の講習です。1コマ目には、エピソード記述の概説と、実感を記述に取り戻すための簡単なワークと、エピソード記述の紹介を、2コマ目にはエピソード記述の具体例についての意見交換、エピソード記述の一部を体験するワーク、質疑応答を予定しています。連続受講は必須ではありませんが、今回初めてエピソード記述に触れる方や、特に理解を深めたい方には、2コマ両方の受講をお勧めします。

【プロフィール】

大倉　得史

青年期のアイデンティティ問題、子育てや保育、障がい、刑事裁判の問題など広く関心を持って、気持ちの赴くままに研究や実践を重ねている。単著に『育てる者への発達心理学』（ナカニシヤ出版, 2011）、共著に『尼崎事件―支配と服従の心理分析』（現代人文社, 2015）、『発達障碍のある人と共に育ち合う―「あなた」と「私」の生涯発達と当事者の視点―』（金鳳堂, 2020）など多数。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。

山本　知香

自閉スペクトラム症の自己性の育ちをテーマに、音楽療法の実践・研究に携わっている。日本音楽療法学会認定音楽療法士。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程。分担執筆「自閉スペクトラム症の子どもとの音楽療法における音・音楽と接面―自己性の育ちへのアプローチ」（鯨岡峻・大倉得史編『接面を生きる人間学―「共に生きる」とはどういうことか―』（ミネルヴァ書房, 2021）pp.131-158）。